

第66回青少年読書感想文コンクール

大阪府入賞 作品紹介 高校の部 /大阪

■特選

◇「廉太郎ノオト」を読んで 大阪信愛学院高1年 小林千泰さん

代々、藩の家老を務めた名門の家柄に育った廉太郎は、琴をたしなむ姉の影響を受け音楽に興味を持っていきました。当時は、音楽など教育ではなく芸の一つであると言われる時代であり、また家老を務め政府の右腕として活躍した父吉弘には、音楽の道に進むことを素直に受け入れてもらうことが出来ませんでした。それでも姉の病死を機に音楽への関心はどんどん高まり、従兄の大吉や、母正子の力添えにより東京音楽学校への進学が開けたことはとても良かったと思います。

大吉宅に下宿させてもらいながら学生生活を過ごすある日、バイオリンが奏でる「G線上のアリア」に誘われて神社境内へ歩き進んで行く廉太郎は、牡丹のように咲き誇る少女の幸田幸の姿を目にすることになります。その後、「ピアノとバイオリンのためのソナタ」を重奏したことを切っ掛けに、幸とは音楽に対する意識と技術を競う仲となり、節目ある毎に重奏の機会を得ながら、特別な存在へと気持ちが移り変わっていく様子はとてもよく伝わってきました。又、糸重や小山、島崎ほか西洋音楽を明治日本に根付かせようと尽力される講師に師事して学び、更にバイオリニストの幸田延やケーベル師との出会いは、廉太郎の音楽に対する熱意に拍車をかけていくことになりました。

一度だけ延の課外講義で、男女がテニスと一緒に楽しむという音楽から離れた場面が出てきますが、そこで「お正月」や「鳩ぽっぽ」の作詞を担当した東くめとの出会いも果たしています。そのことが後にピアノを弾くかわら、作曲へと音楽の幅を拡げていくことに繋がっています。同時に世の中も西洋音楽の影響を受け、日本の音楽史に於ける大きな変化が生まれてきて、芸と言われた音楽が教育に組み込まれようとする動きと重なり、廉太郎にとっては明治文明開化の波に乗ることで真の音楽家への道を切り開いていったように思います。延の紹介によりケーベル師の弟子となり、幸との仲間としての関係も深めながら音楽に携わっていく姿は、若者の夢に向かって突き進んでいく力強さが生き生きと表現され、その前向きな姿勢はとても印象に残りました。

今、私は丁度、廉太郎が夢に向かって進んでいったのと同じ年頃を迎えており、まだ将来の夢は決まっていませんが音楽にはとても興味があります。廉太郎がケーベル師の前で披露した「月光」は、三才からピアノを習い続けている私も弾いたことがあります。私は「有名な人の曲を弾きたい。」という思いでピアノに向かってきて、楽曲が醸し出している情景など想像したことすらありませんでしたし、技術的にそんな余裕もありませんでした。闇の中を連想し、その中に浮かび上がる月の光や静寂な雰囲気やピアノの音で表現する彼の様子からは、若くして天才と呼ばれた高い技術も窺えました。又、小さい頃は年末を迎える度に「お正月」を歌って燥いでおりましたし、音楽の授業では「荒城の月」や「花」などを歌ってきました。現在は中学から続ける吹奏楽部で音楽に携わっています。残念ながら、廉太

郎のピアノ曲には触れたことがなかったので、この本を読み終えて初めて聴いてみました。その中でも、二十四年に満たない短き生涯の最後のピアノ曲となった「憾」は題名の通り、残り少ない命の時間の中で、非情な現実を受け入れなければならない哀しみと迫ってくる死を憾み、三分という短い作品に自身の短い命を重ねながら表現しているようで、深い悲壮感が伝わってきました。

もし長い人生を歩んでいたとしたら、後世に名を残す幸やくめ、ほかたくさん音楽家仲間と共に、名ピアニスト、作曲家としてより大きな功績が期待できた天才音楽家として、世界に名を刻んでいたことと思います。現代に於いて、私たちの頭で考え心に受ける廉太郎の才能と音楽は、幼稚園唱歌や合唱曲を作った人という人物像が根付き、短く壮絶な人生を送ったことを知っている人は少ないのではないのでしょうか。人は、昔も今も変わらず予期せぬ出来事に人生が変わってしまうことがあります。大分から上京し、恵まれた人脈に支えられ、幸と深まり合う絆を確認し、「これから。」という岐路に立つと同じく、死病との闘いが始まった人生は無念というほか言葉が見つからない気がしました。これからも、代表とする「お正月」「花」「荒城の月」の数々の作品は、たくさんの人に愛され親しまれ歌われ、音楽が人と人の心を繋いでいってくれることを切に願っています。（「廉太郎ノオト」谷津矢車／中央公論新社）